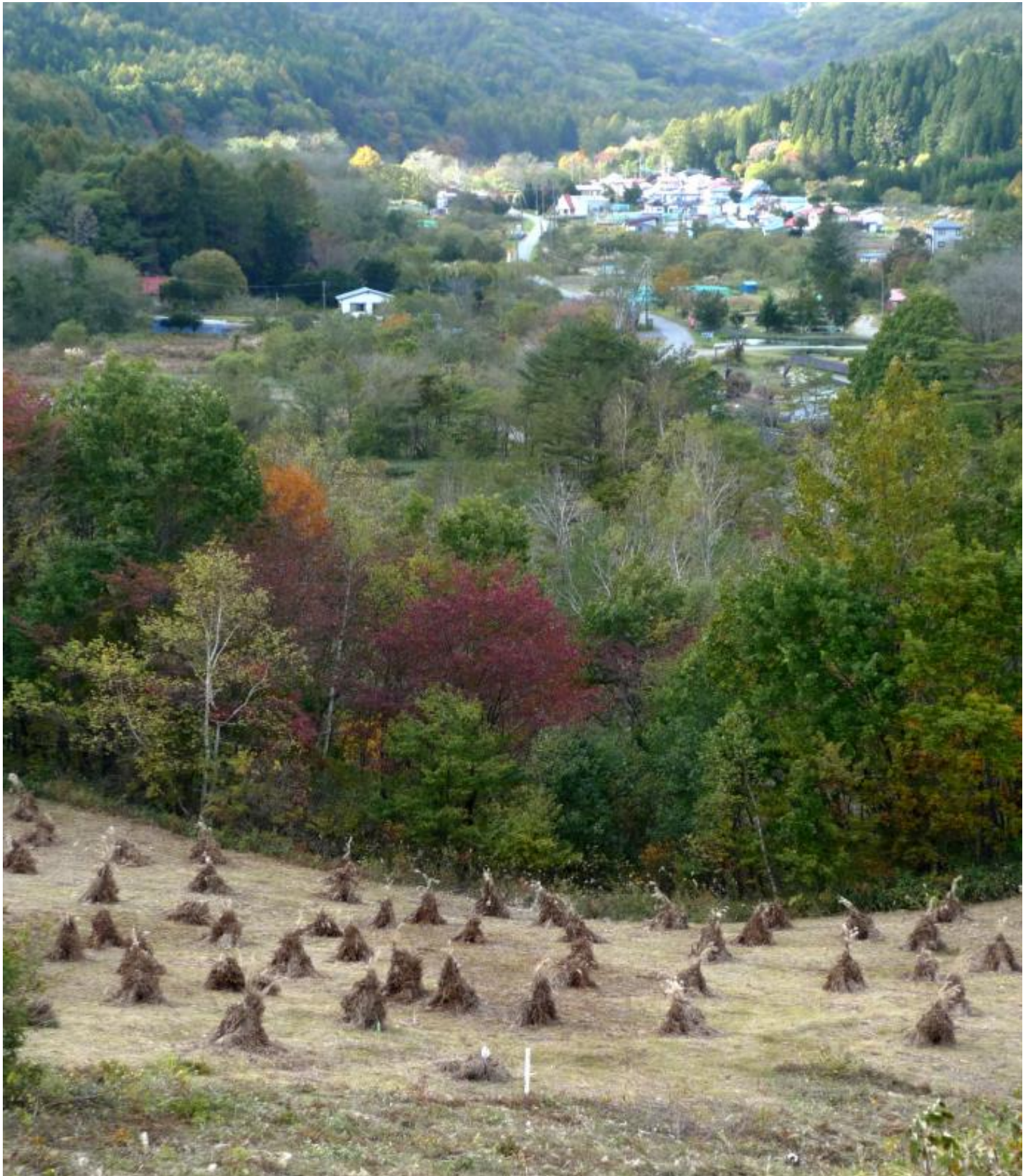




全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol. 26 (Apr. 2016)



土呂部集落を望むように茅ボッチが立ち並ぶ（栃木県日光市土呂部にて／写真提供：飯村孝文氏）

各地からの報告

消えつつある蒜山の草原の“今”

(増井大樹：滋賀県在住)

2015年10月14日と12月6日に環境省等が主催する「草原保全に関するシンポジウム・意見交換会」が蒜山で行われました。2回のイベントで見えてきた蒜山の“今”についてお伝えします。

蒜山の草原は、集落の人たちによって行われる「山焼き」によってこれまで維持されてきました。かつては、田畑の肥料や牛馬の餌のために早朝から草刈りに出かけたりしていたそうですが、現在では草原はほとんど利用されていません。草原を利用しなくなったことや高齢化によって、山焼きをしなくなった集落も増えてきました。この数年で山焼きを止めた場所もあります。それでも、延助集落や湯船集落などをはじめ、伝統的に続いてきた山焼きを今でも守り続けている集落もあります。

10月14日に開かれたシンポジウムでは、集落の人から「山焼きには経済的なメリットがないので、集落で続けていくのは難しい」との声が聞かれました。現在、集落によって行われている山焼きも、このままでは危ない状況なのかもしれません。現在は、わずかですが、行政から山焼きを実施するための予算が集落についていて、それをもとに山焼きが実施できているようですが、金額も少なく、地元の行政の方も、「草原を何とかしたいという思いはあるが、予算もなく、具体的に何をしたらいいかわからない」と困っている様子でした。

では、なぜ今まで集落で山焼きが続いてきたのでしょうか？ 集落の人からは「とにかく焼かないと危ないというのが一番の思いである」との答えがありました。地域の人からすると生物多様性や希少な動植物の保全よりも、焼かなくなったことにより山が荒れたり、火事になる心配が増えることが、山焼きを続ける要因になっているようでした。今まで、環境省はじめ行政では、生物多様性の保全や希少種の生育地として蒜山の草原を見ていましたが、集落の人は防災・減災という視点で蒜山の草原を見ているようで、意識のずれを感じました。

しかし、ただただ、衰退していく草原を見過しているだけではありません。倉敷市にある重井薬用植物園や真庭市にある津黒ふるさといきものふれあい館では数年前より、サクラソウなどの保全のため



10月14日のシンポジウムの様子

に山焼きを実施していて、秋には次の春の山焼きのために防火帯づくりを実施しています。

12月6日には、環境省や重井薬用植物園、津黒ふるさといきものふれあい館などが募集したボランティアによって防火帯づくりが行われました。ボランティアは関係者も含め総勢20名程度で岡山市や倉敷市から参加されている方もいました。それぞれ熊手やフォークを使い草をどけていきましたが、急斜面での作業のため、各々休憩しながらのゆっくりした作業でした。それでも3時間ほどで作業は終了し、その後はみんなで楽しくシシ鍋を食べました。来年の山焼きでは、延助集落の山焼きにもボランティアが初めて参加するそうで、今後、蒜山の山焼きにもボランティアの力がなくてはならないものになるかもしれません。



ボランティアによる防火帯づくり

「生態系を守る環境にやさしい石けん系消火剤の野焼き活動での応用」
 ～島根県大田市三瓶山西の原でのユーステストについて（速報）～
 （波多江修一・川原貴佳：シャボン玉石けん株式会社 研究開発部）

1. 三瓶山西の原火入れでのユーステストの実施

平成 28 年 3 月 23 日（水）10 時から 16 時にかけての三瓶山西の原の火入れにおいて、消火活動をする際に「環境にやさしい石けん系消火剤」と水を比較したユーステストを実施しましたので、結果を報告いたします。



図 1 島根県三瓶山西の原の火入れの様子

2. 背景と目的

草原の保全・再生などの観点から野焼きや火入れは非常に重要な取り組みであり、三瓶山でも西の原で火入れを行っています。非燃焼区域への飛び火を抑制するために、ジェットシューターを用いる延焼抑制を目的とした消火活動を行いながら火入れを行っています。しかし、想定外の延焼による火入れスタッフの安全確保の課題、消火のための大量の水を運搬するなどの作業面での負担などが指摘されています。そこで、水ではなく、当社が開発した「環境にやさしい石けん系消火剤」を用いて、安全かつ効率的な延焼抑制活動での有効性を確認するため、三瓶山にてユーステストを実施することにしました。本ユーステストは、火入れスタッフの方にご使用いただき、アンケート調査およびヒアリングを通じて石けん系消火剤の効果を見出すことを目的としています。本報告では、ヒアリングの結果をご報告いたします。

用いた石けん系消火剤は、水よりも消火効果が高いため少水量で消火でき、残留性がなく、水生生物の毒性が低いため、自然環境への影響が低いという特徴を有することから、野焼きや火入れ作業におけ

る「安全管理の向上」、「作業性の向上」に貢献できる可能性があると考えられます。

3. 実験方法と結果

実験は、午前と午後の 2 回実施しました。火入れは 8 班に分かれており、1 班 8 名で構成されています。そのうちジェットシューターを背負い消火活動を実施する 6 名の方にユーステストにご協力いただきました。午前の部では、6 名中 3 名が消火剤を用いた消火活動、残りの 3 名の方には従来通りの水を用いた消火活動を実施していただきました。午後の部では、午前の部と入れ替えて、水を使用したスタッフに消火剤を、消火剤を使用したスタッフに水を用いた消火活動を実施していただきました。

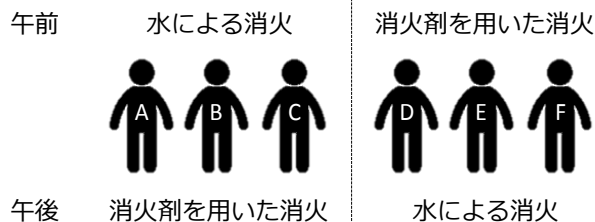


図 2 消火活動の班分け

ヒアリングでは、水での消火と比較して「速やかに消火できる」、「再燃防止効果が高い」、「少量の水で消火できる」などのお声を多くいただくことができました。



図 3 火入れ従事者による消火活動



図 4 残火処理と泡の様子

4. まとめ

これまで北九州市の平尾台で行われる野焼きにおいて、石けん系消火剤の実証実験を行い、その有効性を確認してきました。本実験でも、これまでと同様に「水と比較して速やかに消火できる」、「少量の水で消火できる」などのコメントをいただいたことか

ら、火入れの方法が異なる野焼きにおいても石けん系消火剤は有効であることが確認できました。本報告では、ヒアリングの結果だけでしたので、今回はアンケート結果を追加し、ご報告したいと思います。

今後は、三瓶山西の原も含めた方法が異なる様々な野焼きや火入れに参加させていただき、「環境にやさしい石けん系消火剤」の有効性を確かめていきたいと思います。現場の方々のお話を聞かせていただきながら、使用方法などの資料を作成し、できるだけ早く商品としてご提供できるよう体制を整えていきたいと思います。

5. 謝辞

今回の三瓶山でのユーステストにおきましては、大田市役所の下垣課長をはじめ、関係者の方々に多大なご協力とご支援をいただきました。この場をおかりし厚く御礼申し上げます。

全国草原リレー（第12回）・団体リレー（第2回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第12回は、理事でもある国安氏に、群馬県館林市の多々良沼のヨシ焼きについて紹介して頂きます。

また、先般から始まった「団体リレー」は、ネットワークの加盟団体などから、その取り組みなどを紹介して頂きます。第2回は、日光茅ボッチの会の飯村氏より取り組みを紹介して頂きます。

多々良沼（群馬県館林市）のヨシ焼き

（国安俊夫：ネットワーク理事）

3月16日に実施された「多々良沼のヨシ焼き」を見に行ってきました。多々良沼ってご存知でしょうか？ 関東平野の北に位置し、北は渡良瀬川、南は利根川に挟まれた低地部標高（20m）に位置する、

面積約75ha、周囲約6kmの広大な沼で、県立自然公園として整備されており、周辺には水田と住宅地が広がっています。

正直いって私は、白鳥の渡来地、水鳥の越冬地と



ヨシ焼き範囲：赤のポイントは点火位置



ヨシ焼き風景とそれを見物する人達：②と③の中間地点より望む

しての認識しかなく、草原データベースにも載っている草原という認識は全くありませんでした。でもよく考えると、近くの渡良瀬遊水地も小櫃川河川敷も同じような条件で火入れされているので、ここでも火入れが行われていてもおかしくないですね。

ヨシ焼きは昔から行われていたわけではなく、ヨシの利用が廃れてしまったことと、周辺の開発により沼が富養化し植生に変化が出てきたため、多々良沼の植生環境保全・復活活動の一環として、沼北西部(通称ガバ沼周辺)のヨシ原復元を目的とし、多々良沼自然公園を愛する会が主催し、公園を管理している県土木事務所、地元漁協、地域住民他の協力を得ながら、2004年から毎年3月中旬の日曜日に延焼防止のためのヨシ刈を、3日後の水曜日にヨシ焼きを行っているそうです。

ただ、東日本大震災のあった2011年春は急きょ中止し、また2012、2013年の2か年は、ヨシ刈は行ったものの、ヨシ焼きは放射能の拡散防止のため中止し、3年前から再開しています。ちなみに、群馬県では5年たってもまだ、野性のイノシシやシカの肉の販売や、シイタケの販売は禁止されています。

火入れ当日は消防署職員も含め約50名の関係者



驚いてガバ沼から飛び立つ水鳥達 (撮影者：齋藤次江様)

が朝8時半に集合し、趣旨や注意事項の説明の後、数班に分かれて点火作業に着手されました。この日は久しぶりに暖かく晴天で風もほとんどなく、野焼きには最適の日でした。9時に数か所から火の手が上がり、カモやまだ残っていた白鳥が沼から飛び立ち、ほぼ鎮火した焼け跡を1頭のタヌキがあたりを気にしながら横断してゆくのも見かけました。

参考：多々良沼自然公園を愛する会ホームページ
多々良沼・城沼自然再生協議会ホームページ



点火前：ヨシ焼き実施個所の間を流れる多々良沼に流入する多々良川の本流



ヨシ焼き後：ガバ沼の水面が望み見える

第11回全国草原サミット・シンポジウムについて

【期 日】 2016年10月15日～17日
【場 所】 兵庫県美方郡新温泉町
町民センター・上山高原など

【主な内容 (予定)】

10月15日 上山高原の現地見学会
10月16日 全国草原シンポジウム・分科会
10月17日 全国草原サミット

<シンポジウム・分科会での予定講演>

- ・草原についての基調講演 (元神戸大学 武田氏)
- ・野草堆肥の善玉菌 (佐賀大学教授 染谷氏)
- ・茅プロジェクトの紹介 (芸北中学校)
- ・上山高原の観光利用とジオパーク
- ・かやぶき屋根とススキについて など

日光茅ポッチの会－茅ポッチのある風景と草原植物を守る－

(飯村孝文：日光茅ポッチの会代表)

■土呂部の草原

全国の市町村の中で3番目に面積が広い栃木県日光市。日光東照宮などが世界遺産に登録され、観光地として多くの人々が訪れる地方都市です。日光東照宮から北に約40km、周辺を山に囲まれた鬼怒川源流の標高930mの盆地に、土呂部（どろぶ）という小さな集落があります。高齢化が極端に進んだいわゆる限界集落です。

この集落を囲むように約6haの美しい半自然草原が広がります。栃木県内では唯一となってしまったミズバショウが自生する湿地に、この草原が絶えず水を供給します。草原は、春のスミレ類・ヒメハギ・オカオグルマに始まり、夏から秋にかけてはニコウキスゲ・オミナエシ・カワラナデシコ・ワレモコウ・コウリンカ・キセワタなどの美しくも希少な花々で彩られます。地元の人々は、初夏にはワラビなどの山菜を採り、夏の花々は「盆花」として仏様に供えます。秋、草原に「茅ポッチ」が整然と立ち並びます。茅ポッチにして乾燥した草は、冬場の牛の飼料や敷き材に利用されています。



初夏の草原



初夏の草原



春、ミズバショウ自生地の様子

土呂部の人々はこの草原を親しみを込めて「カップ」と呼び、数百年以上にわたり大切に守ってきました。この草原からもたらされる恵みは、山菜の採取はもとより、かつては茅葺き屋根の材料や家の断熱材、炭俵の材料、また牛馬の飼料、畑の肥料にと、人々の生活



土呂部の盆花

に欠かせないものでした。草原や薪炭林、畑・水田などを一体的に利用しながら自然の恵みを絶やすことなく長い年月を継続してきた生活がありました。

■草原の減少と荒廃

しかし全国の草原が減少する流れと同じく、土呂部の草原も減少の一途をたどっています。繁殖牛の飼育が盛んだったこともあり平成の初期頃までは約20haの草原が利用され維持されてきましたが、その後、牛の飼育も下火となり、生業の変化に伴う管理放棄や植林などにより草原は急激に減少し、現在は6haほどが残されるのみとなりました。残された6haの草原も採草利用がされているのはわずか1ha弱という状況です。放棄された草原にはシラカンバ・コナラ・ヤマナラシなどが侵入し森林化が進行しているばかりでなく、ニホンジカによる草原植物の食害も近年増加傾向にあります。

さらに、若者が町に出て働き手がいなくなったことも草原の減少や農地の荒廃、さらに土呂部地域全体の活力低下に拍車をかけています。

■日光茅ボッチの会の発足

土呂部の草原はわずか6haですが、栃木県内では最大の半自然草原です。このわずかに残された美しい草原も時代の流れに逆らえず森林化が進み、存続の危機にあります。

地元の人々が残してきた「カッパ」を後生に残したい、茅ボッチが立ち並ぶホッとする秋の風景と、美しい草花が咲き競い草原性の虫たちが飛び回る環境を守っていききたいと、2013年、仲間たちと「日光茅ボッチの会」を発足しました。そして地元の方々のご協力とご指導をいただきながら、草刈りや低木の伐採、茅ボッチづくり、電気柵の設置など、できることから活動を進めています。



電気柵ケーブル敷設作業

当面は森林化が進行している草原の低木の伐採搬出や草刈りや電気柵の管理が主な活動ですが、平行して茅ボッチを立てるエリアの拡大や植物調査、草原管理方法の研究などを行っています。また、地域の魅力を多くの方々に知ってもらうためのイベントも昨年从小規模ながら開催しています。初夏の植物観察会や秋の茅ボッチづくり、また冬はカンジキを履いてカエデの樹液を採りメープルシロップを作って味わうイベントなど、今後も継続して発展させていこうと思っています。



カエデの樹液を採りメープルシロップを作る



秋、集落を囲むように茅ボッチが立ち並ぶ



学生が茅ボッチに命を吹き込んでくれました

■これからの活動に向けて

そんな中、群馬県水上町で保全活動を続けている「森林塾青水」の活動に参加させていただく機会があり、知り合った皆さんが土呂部にも来てくださいました。同じ目標に向けて継続した活動を実践されている方々のお話や考え方は、日光茅ボッチの会の活動を進める上でとても参考になり大きなプラスとなります。また、土呂部で以前から農地の再生を試みている宇都宮大学の学生サークルの皆さんも当会の活動に協力してくれるようになり、若い世代の感性とパワーを分けてもらっています。

今年は、地元の元気なお母さん方が当会のイベントでおいしい昼食を用意してくれる話も進んでいます。地元に住んでいる方々の理解は何にも増してうれしいことです。当会は20名あまりの会員で活動を始めたばかりです。まだまだわからないことも多く試行錯誤を繰り返しながら保全活動を行っている状況です。全国草原再生ネットワークに参加されている皆さんの活動にはまだまだ及びませんが、多くの方々との交流を深めるなかで少しずつ活動の幅を広げていきたいと思っています。

草原をめぐる動き（2016年4月～7月）

- 4/1 扇山火まつり（場所：大分県別府市扇山、連絡先：別府八湯まつり実行委員会）
- 4月上旬 塩塚高原野焼き（場所：愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先：四国中央市観光協会・三好市役所）
- 4/3 深入山山焼きまつり（場所：広島県山県郡安芸太田町、連絡先：安芸太田町観光協会）
- 4/16-17 茅場野焼きと早春の里山散策（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 4/24 山焼き後の雲月山植物観察会（場所：広島県山県郡北広島町雲月山、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 4/30 「京都桂川のカヤ原」の春を満喫！スペシャルツアー（場所：桂川河川敷、連絡先：リバーフィールド）
- 5/7 サクラソウの観察会（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 5/7, 28 乙女高原のスマレ観察会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 5月中旬 小清水原生花園「火入れ」（場所：北海道斜里郡小清水町、連絡先：小清水町役場）
- 5/15 乙女高原の遊歩道づくり（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 5/21-22 藤原の山菜&ブナ新緑の森（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 6/26 マルハナバチ調べ（初夏編）（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

事務局からのお知らせ

全国草原再生ネットワーク 10周年記念行事&総会の案内

全国草原再生ネットワークでは、10周年を記念した行事と総会を下記のとおり開催します。草原保全を振り返るための各団体の活動報告、これからの草原を語るシンポジウムの2部構成です。

<10周年記念行事>

【日時】2016年6月25日（土） 14:00～17:30

【場所】朝日新聞東京本社読者ホール（東京都中央区築地5-3-2）

【内容】これまでの10年を振り返る各団体の活動報告、これからの草原を語るシンポジウム
※終了後、懇親会を予定しています。

<総会>

【日時】2016年6月26日（日） 10:00～12:00

【場所】オフィス東京（東京駅八重洲口 <https://www.officetokyo.net>）

【内容】事業報告、事業計画、各地からの報告や意見交換

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 26 2016年4月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】先日九州地方を襲った熊本地震では、草原を有する阿蘇地方でも大きな被害が生じたようです。お見舞い申し上げます。ネットワークの関係者の方の中にも、一時避難された方がおられると伺っております。一日も早く日常の生活に戻れることを願っております。